飜へる如く一つの球を追うて走る野手のまぼろし！
ユニホームをしぼれば水の様にしたたり落ちたあの汗
……。

試合それは一種の爭ひだ。然し醜いそれではない
正しい純な闘ひだ。
それだけ敗れた者は淋しい悲哀だ。

「我にもう一度大會あらしめよ、そしたら純白のプレートからはきつと〳〵
敵を苦しめるに充分の球を投げて居たのに……」と歎
せられた先輩もあつた。
丁度その時の心持ちだ。

蟬がなく暑い〳〵日は照り續く。
練習の時には慰安の音樂にきいたこの蟬の聲も今日は
淋しい送別の聲だ
元氣よく出た合宿の門も今日は去りゆく敗者を送るば
かり……。

「彦根中學野球部合宿所」と筆太にかゝれた標札はめ
ちや〳〵に破られてゐる。

私達の憂鬱もしらずに日は照る蟬はなく
もそつと靜かにないてくれ
もう少しやわらかく照つてくれ。

「左樣なら」
「さようなら」
「さらば……」憂鬱な顔に無理に笑を浮べて——
敗者の悲哀——
孤獨！

球友との力なき歩み！
日は高く道は燒けて遠くの方には自働車の音が——
青空には一團又一團と雲がとぶ
なま温い風が時折濠ばたの柳の木をゆする
止度もなく流れる涙をふく手にはその指には——

小さく堅く出來た二つのまめ——
おゝ思ひ出のピッチングの紀念が唯僅かに……。

心淋しく歸りゆく敗者は何處へか？
父健在で母居ます樂しい家？
弟や妹の向へてくれる温しい庭？
然し——然し——
そこには幾何や三角の堅い冷い本が待つてゐる

暑い夏の日の「ミー〳〵」のみが俺の胸にひゞく
「さようなら……」球友達の親しい聲ばかりが耳に殘
つてゐる。

煙る時雨

川島吉之助

煙る時雨の我が心に泌むるかな
忍び泣きの音のそれの如

サラ〳〵とペンの歩みよ
淡水色のおとずれに
ロづけと共に入れにしクローバ!!!
微かにも胸どよめきてペンのさき
何の穢れもなき眞白き紙に
只一つの眞赤きインク跡鮮かに泌みぬ
君の優しき姿鮮かに刻める
我が胸のそれの如
戰く胸に手を重ねてそと笑みぬ忍びやかに。

銀の花瓶

文机の銀の花瓶に
投げ入れにしコスモスの
今宵微笑みて咲きぬ
青白き月光の下に
なよ〳〵と花開きしコスモス
寄りそひてそと口づくれば
其の甘き香快く
胸に泌むかな。

秋の月

黒田英麿

秋の月
雲に包まる大空に
星もなきに唯一人出でて
光る、光る。
おゝ！その凄さ！

背に受けて血を吐く叫び
その意氣にかくも染まるか

西に落つ夕陽は舞ひて
英傑の古城照らせば
その名殘淡く止む
朽ち果てし甍は映えて
武士道の華かなりし
古の我が眼に浮ぶ

濃き綠靑く茂りて
我が胸に永久に消ゆなき
懷しき思を殘し
洩れ出づる鐘の響よ
秋迫る紅き湖畔に
般々とその音の震ふ

苔蒸して殘る大石
蔓草のいたく茂りて

ふるさと

吉原茂

黃昏の紅き夕映
山の邊に染るその色
若〻が雄々しく立ちて
西の端に沈む夕陽を

默々と古跡を守る
彌高き松に圍まれ
黃に映ゆる哀れ白壁
思ふだに涙滲るゝ

今も尙殘るその跡
盡き果てぬ思を秘めて
白々と波立つ湖に
麗しく姿を映し
安らかに眠る岸邊に
ひた〳〵と形をくずす

ほの淡き夕の大氣は
陽に映ゆる古城を包み
秋の香の微に匂ふ
野を步む童を乘せて
打震ふ鐘の響に
溶け合ひて暗く滿ち行く

嗚呼斯くも世に蠢ける
偉大なる歷史を秘めて
故鄕よ霞の中に
永遠に默してねむれ
我も亦固く眼閉し
莊嚴の汝が美に醉はん

秋の朝

松宮實

朝早く床を離れて裏庭を
あちらこちらと彷徨ふ時に
サツ！と凉風の吹き來りて
邪氣自ら去り行く
あゝ!! 淸らけき秋の朝

東雲の五色に染まりて
太陽は徐々に昇り行く

下界に限なき恵みを垂れつゝ
氣自ら靜けきを覺ゆ
あゝ!! 心地よき秋の朝

眼醒めたる家口からは
やがて朝の靜けさを破り
威勢のよい聲のひゞきて
氣自ら蘇れる如し
あゝ!! 勇ましき秋の朝

自動車の走るあり、人の歩むあり
かくて寂寞の巷は征服せられて
潑溂たる活動の巷と化して行き
氣自ら湧きかへる
あゝ!!! 輝きわたる秋の朝

希望溢るゝ如き若人の活躍は
到る所に、堂々と展開されて行く
時は今、凡べて活動の秋

正氣自ら我等を圍む
あゝ!!! 花々しき秋の朝

四季の景色

名畑悠次

春

早梅が蕾を破る香の梢　天地は飾る百花の色
春霞にかすむ遠山の姿　黄い菜の花に胡蝶の舞ふ
青空に奏す雲雀の樂　野邊に草摘む少女子(ナトメゴ)
畑打つ農夫
あゝ長閑なる哉春の日よ

夏

杜鵑(トケン)一聲夏の空　天地は綠、色深し
磯波白き夏の海　魚釣り多し綠葉の蔭
水に樂しむ子供達　夕河原、にぎわし夏の夕
蛙鳴く
あゝ趣深し夏の日よ

秋

秋の七草色どりて　田にせはし鳴子の聲
錦に織つた紅葉の木　豊年を知らす百姓の顔
虫の樂にぎわし夏の夜　秋月河水にきらめく
百姓嬉ぶ
あゝ冷しき哉秋の日よ

冬

あたり一面銀世界　雪の兎も盆の上
犬は喜ぶ雪の上　雀は軒ばでさむさうに
さかへし木々もをとろへて
木々山々は綿帽子
猫が泣く
あゝ興深し冬の日よ

たより

竹内一

一人でも
淋しくないと
書いたけど
不自由は
少しもないとは
書いたけど。

淋しくて
ポストへいれるその時は
切なくなつてなけて來た——

蟬の思ひ出

今年も蟬が鳴いてゐる
小さい時はあの蟬を
とつては母を困らした

母は逃せと言つたけど
僕は大事にしておいた。

秋の中ばになつてから

あの蟬入れた小箱をば
見つけてあけて驚いた

蟻が一ぱい入つてゝ
蟬のお腹が空つぽだ。

翌年母は旅立つた
そろ〳〵蟬の鳴く頃に
歸ることなき旅路へと

蟬は今年もないてゐる
けれど母さんは歸らない

ジィ〳〵鳴いてる黑い蟬
夏の眞晝に横とびに
飛ぶあの姿がなつかしい。

くじやく

名畑惣次

僕が都に行つた時
動物園の園の中に
女王の樣に美しい
はねを廣げてあるいてる
孔雀にひとりでみとれてた

夕やけ

お山の向ふの空の色
炭火のやうにまつかいな
あれあれお家も畠も木も
まつかにもえた火がついた
天の祭のかがり火か
次第次第に消えて行く
終に何も見えないが

あとに鳥が鳴いて行く

花畠

妹が折角ねん入れて
こしらへおいた花畠
夕べの風で皆をれて
後にのこつた菊ひとつ

星

ピカーリ輝く星の群
あみのさかなの鱗のやう

うちのお池

朝起きて何心なく
お池を見れば
靜かな面に二つ三つ
蓮が立つてゐた

雜詠

宮崎信義

冬の陽を我が背に浴びつつ道ゆけばわらやの軒につり柿の見ゆ

鶯の聲かすかに聞ゆひるさがりかきねのかなた陽淡のもゆ
我をして遠き古に遊ばしむあまたの木ぼりならびてありけり
負けるなよ戰ふならば負けるなよ負けし悲み口もて言へず
しと〳〵とさみだれけぶりつばめ飛ぶやはき黑羽の靑く光れる
夢思ひつつやさしきコスモスながめねれば君を見うけし幻の現る
ジヤストミート！たゞひたすらに走りゆく球はと見れば外野手の追ふ
しぐれ來て物憂く書を見入るかな落葉にあたる音を聞きつゝ
日本の現狀が餘りはがゆくて俺がと思ひねてもねむれず
心から兄よ弟よとよばれたらいかにうれしき一度でもよし
友達のなやみ深きを我知らずかく言ひし後を一人で泣きたり
淋しさを笑ひにまぎらはさんと笑ひたりし後より涙にじみ出るなり
近頃めつきりおとろへし我が母を電燈の下でしみ〴〵と視る
此頃は何か不安で迷ひ迷ふ自分で自分の心をおそる
休暇にて何するともなしねころびて天井のふしをみつめゐたりき

自己解剖

飯村天祐

通されし奥の座敷の鐵瓶のさびたる音のゆかしくもあるかな
ねつかれぬ床の中にて聞く時の時計の響のうらめしさかな
ふと人の戀ひしくなりて友達のかたをいだきて泣きたりし我
三つになる可愛ゆき弟のなす事をヂツト眺めて一人で微笑む
うたゝねに母のいらへの物憂くて吾淋みしくも口をつぐみぬ
ふとかすむものを追はんと思へども思ひ出せざる空虛の淋しさ
玄關前の一本櫻が咲かざりき去年の秋は咲きしを見しが（彦中玄關口の櫻）
つきつめて何が樂しといふならず心せはしく一人微笑む
誰がつみし秋の野原の草なるか吾知らずして踏みにけるかな
何かしら忘れ物でもしたる如手持ぶさたに後ふりむきぬ

月

夏川省吾

あかつきと見まがふまでに月冴えて東の空にのぼりそめけり
夕がほの人まちげなるのきのへに友待つ夏の夕ぞうれし
時ならぬ山のかすみにつゝまれてすみやく杣の心やさびしや
わくらばにうもるゝ栗をもとめつゝ秋の日暮を友とすごしつ

秋

川島吉之助

山ひだの影るは悲し實のりたる稻田の上に秋風ぞ吹く
靜に水面にきゆる雨足に秋たけたるを知るぞ悲しき

冬

あさなさは蔓の上に寒々と置く霜見れば冬來たるらし
文がらの燃ゆる煙の紫を見つむる冬の夜はうら悲し

白き雲

一圓宣雄

白き雲谷より出でて美しき櫻の山を包む雨の日
やはらかに雨の泌みたる板橋に松の枯葉の散れる淋しさ

舵音

組田重嘉

そよ風も吹かで濱邊は靜かなり沖行く船の舵音聞ゆ
春日和外に出たき我なれど淋しさ增して今日も歸りぬ
春雨の靜けく濺ぐこの夕べ古き日記のこの頃を讀む
いざ〳〵と誓へどすぐにこれを悔ゆ我の心は我に分らず
堀端にうす紫のふじの花優さしく垂れぬ杙打つ音す
春晴れの樂しきひと日暮れにけり街の燈火早くもつきぬ
秋深し憂いだきてたゝずめるコートの櫻黃ばめるかも
朽ちさびしとゆより落つる一筋の銀の流れよじつと見守る
君の待つ田舍小驛に下り立ちぬみ顏浮べて傘ひろげるも
悲しきは友の誤解よ彼の塀に幾度もたれてお城仰ぎし
時經てば癒さるべしと友云へど誤解の涙何時かは盡きん
誤解とは悲しき二字よ我が生活かくも爛く儚くあれば
何事か幸ある如き心持して晴れしみ空に口笛吹きぬ
姉君といさかひしたる氣まづさよ今宵の月は青く冷たし

秋晴れの朝に姉は旅立ちぬ幸よあれかし獨り水打つ
事あらばともに泣くべき姉あれば我は多幸とひそかに思ふ
山蔭のみどりの淵にたゝづめばため息つける姿うつりぬ
夕暮は淋しと云ひし彼の友よ今宵も窓に月眺むらむ

きさらぎ！

種村捨三

きさらぎのみ空遙けし眞東に音なく落つる流星一つ
紅に染りし遠の靈仙に今しあさひのいでなんとする
年賀狀を出しに行けば彼方よりひやりと寒き極月の風
曲りたる細き野路を弟らといりひを浴びて我は歸れり
軒下に植え飾りたる盆梅の日增しに咲きて春深み行く
ひむがしに向きたる家の盆梅は朝日を受けてふくらみそめぬ
通り行く鳥屋の籠にヲンドリのあかきとさかがちらと見えけり
さぎり立つ野路をしゆけば聞ゆなりえものをあさる獵銃のこえ
立並ぶ松の並木に風吹きてむかしの音をきゝたり我は
ちぎれ雲西に走るを見つめつゝ雨は何時かと鶴首して待つ

鼠の子數匹呑みし白蛇をよつてたかつてたゝき殺しぬ
宵闇に絹さく如く椽先にあきをしらぶるきりぎりすなく
吸ひあきて醉者(ヨイドレ)のごと血肥りて戸に止りおる蚊のにくらしき
かにかくに推理の力衰へき我をにくみし日もありしかな
捨てられし小狗の命悲しかり雨のそぼふる芹の堤に
ひよツくりと出てひよツくり沈みぬかいつぶりはおもしろきかな
枝渡る小鳥の如く春の日のわが心かろく移り行くかな
聲立てゝ得意げによむ小說の母のよみぐせおもしろきかな

南瓜

清水正義

ほつかりと秋とも知らず咲いてゐるちりすて場の南瓜の花
打水をして間のないプラットに煙草のスイガラが目立つ朝なり
指先をねぶつて障子に穴あけた子供の目には涙が光つてる
板塀のやぶれたとこから白犬が出て來た町の道に草がはえてた

影

嚴佐正三

きら〳〵と草葉の露が光るかな我が影長し春のあけぼの
薄みどり濃きみどりとを織り混ぜし山の木かげに躑躅咲く見ゆ
日は落ちて杉の樹立は黑くなり蛙の聲はしげくなりゆく
むく〳〵と入道雲が大空に聳えて見ゆる夏の日ざかり
道のほとり川の堤の彼岸花今は色あせ秋深みゆく

元旦

川澄健一

元朝や殘月淡し松の色
嬉しげに囀る雀や初日影
東雲の空に輝く國旗かな

寒夜

しん〳〵と更け行く夜の寒さかな
寒き夜を餅燒きながら讀書かな

木枯をしんみりと聞く寒夜かな
埋火や灰かきまぜる寒き夜

秋

殘蟬切れ〳〵になる秋あはれ
栗のいが殘して散れる木の葉かな
栗のいがとがり切つたる秋深し
夕立の去りたる後のざくろかな
烏鳴く桐の實の落つ秋の暮
ざくろの赤くなりゆく秋深し

雜詠

ねころびし顏に散り來る櫻かな
太陽の白くなりゆく暑さかな
梅雨霽れの雫に光る入日かな
股火して着物焦しつ冬ごもり
青柳頭撫でたる土手づたひ
草むらや雀とびたつ露の玉
だら〳〵と坂上りけり油蟬
秋空や赤とんぼとまる古垣根
ペン先の太くなりたるノートかな
松風や山の端に立つ國旗かな
何事か語り合ひたる屋根雀
大空を慕ひて登る秋の山

月

宮崎信義

名月や空寒うして犬のほゆ
春の夜のおぼろ月夜や梅香る
虫聲をきゝわけてゐる留守居かな
もれ來る月やいづこと脊のびかな
すみ切れる月の光や笹動く

桐の一葉

夏川省吾

しづかな夜桐の一葉の落ちる音
コスモスや日暮の雨にたふれけり

秋の月

吉田篤太郎

朧夜のかすかにうつる秋の月
蟲の聲さびしく響く秋の夜

春

一圓宣雄

山寺の鐘靜かなり春の暮
古池に石を投げてる子供かな
輕く散る齒磨の粉や春の朝

夏

杉山甚一

じい〳〵と木立に蟬のあつさ哉
かねたゝく童の聲や地藏盆
伊吹山つかれ忘れて日の出見る
湯上りにうちは一つの夕すゞみ
日車のたれて夕日のあかさかな
夕立やぬれてたゝづむ人の軒
柿の實の落ちて聲あり秋の風
まだ咲くか百日紅よくれなゐに

寒月

種村捨三

寒月の光しづけき夜更かな
野分けしてあらはに淋し冬木立
つもごりやかゞり火赤し多賀の森
風呂上り勵めども心又眠る
三日經て飾りの餅は割れにけり
初霜にあらはに淋し寒椿
日は暮れて今宵小寒き冬の雨

秋

淺島希一

ぽつねんと案山子頑張る黃金の田
朝露に傘さしてけり菊の花
朗らかに鳥のいなゝく秋の朝
賑かに唄聲聞ゆ工場かな
首すぢに朝風寒し霜の朝
冬枯れて枯葉の鳴るぞあはれなり

野道

久馬幸衛

秋晴の穗波わけ行く野道かな
籌もゆる鎭守の森の黑さかな

蚊遣

澤田平三郎

夕涼み椽に蚊遣の煙哉
初秋やいなど飛びかふ賑かさ
風泌みて野邊に波うつすすき哉

夕立によみがへりたる蟬の聲
張りかへし障子明るき初冬哉
正月や加留多一つで過ぎにけり

話の種

竹内　一

兄ころび話の種が一つふえ
クロバーを思案あまつてむしりけり
三ケ日すんで日記はやめになり
めがねごし見る子の脊の高さかな
身ぶるひを猫がしてたつ秋の暮
どの湊に秋が來てるかきりぎりす
夕やけを背にして影の長さかな
泣きながら子供巡査に抱かれてる
弟は魚はつれぬがとんぼ釣り

旅行記

第五學年修學旅行記

若原文五平

十月七日　第一日

淡曇りである。併し何處となく明るい七日の朝が明けた。餘り氣乘のせなかつた旅行ではあるが、當日となると矢張り驛への歩度も自ら增した。旅行や遠足には輕便を好む吾輩である。三食分の辨當に洋傘の邪魔物が氣になつて仕樣がない。やがて車中の人となつてあらゆる厄介物を身より離してゆつくり席を占めた時初めて「旅への第一歩だ」といふ歡喜が何處からともなく湧いた。

七時四十四分彦根發。白亞青松の金龜城が朝靄の中に姿を消した時には汽車は既に犬上川にかゝつてゐた。漸くみのり

かけた黄綠の近江野を颯々と吹く秋風を左右に排しながら吾〻等は進んで行く。曉の空を背景として薄暗く朝靄に眠つてゐる連山を眺め談笑娯樂に耽る中、野州八幡は夢の間に大津去り山科を過き早や京都についた。山崎を過ぎて一二分楠公訣別の地も左窓下に一瞬の間に消えた。

ビールの廣告に吹田を知りやがて幅廣き淀川にさしかゝる遲々として漸く渡りきつた汽車は大阪驛構内へ騷々しく突入した。

神戸に近づいた頃遙か右方に丘陵の中腹に傲然として俯瞰せる洋館の數々を見た。之に反し羨望否怨恨の眼を以て之等高樓を見上げてゐる貧民窟にもたとふべき茅屋の連續を見た時今更ながら現代社會の混沌たるを感じた。

神戸を過ぎて汽車は須磨舞子の海岸を走る。渺々たる青海原に靜かに漂ふ漁船の數々は青松の間に隱見し時に靡がへるかもめは白砂とともに波と松の緣に程よき配合を與へる。素朴な漁家や麗美な洋館は車窓の眺めを妨ぐることが夥しい。

午後二時三十三分遂に明石についた。先づ明石城址の見學。濕潤なる樹下にはたゞ陰慘の氣のみ漂うてそこには天守の礎石とおもはれるものさへ殘つてゐない。人麿神社に詣でゝ後解散各自海濱を逍遙した。二時二十三分明石發同三時二十分姫路着、劉曉たる刺叭のひゞくあたり巍然として聳えたる白鷺城を仰ぐ。天守閣にのぼればその外見の優美なるに似ず構造の雄大なるに驚く。山麓の公園に一憩後秋雨煙る薄暗き夜の城下町を十一時迄ぶらつく。明石と言ひ姫路といひ一見市とも思へぬ靜寂な町である。午後十一時三分宮島に向つて出發。

八日。車中一泊とはいふものゝ眼醒め勝ちな一夜は何時の間にか明けて午前六時宮島に下車直に汽船で嚴島に渡つた。豫想外に廣いこの海峽を遙か朝霧をつき海波を蹴つて滑りゆく堂々たる一汽船を見る。

島に上陸先づ嚴島神社に詣でた。丁度引汐時で海藻等の殘留してゐる砂上に潮に朽ち魚介に侵された足をさらけ出して捨てられたやうに立つてゐる大鳥居朱の廻廊を見ては先づ開いた口が閉ぢられなかつた。此れは深く期待しあつく信じてゐた大理想の体よく裏切られた時の失望悲觀の形だらうか？あゝ不運なる我等は遂に三景の一を稱し得なかつた。神前毎に拍手を打つ敬虔な一老翁の說明で廊を廻る。寶物を拜觀後一同大鳥居を背景に記念撮影をした。暫時海岸を自由に散策

後回島を辭して宮島驛に着いた。

十時三十八分宮島發昨夜睡眠不足の爲頻りに睡氣を催す。何時しか我が本州の南端下關に着いた。はき出されたやうな降客の流れにのつて連絡船に乘りこみ上甲板に出ると目指す九州の連山は直ぐ目前にそびえ黃金色の夕靄の中に門司が輝いてゐる。

嚴島海峽の意外に廣いのに驚ろいた我等は是に於て關門海峽の餘りに峽いのに驚ろかされた。蓋し兩者ともその幅員に於ては伯仲したものであるが、その豫想が位置の相異より起つた錯覺であつたのである。門司に下船した時驛員がメガホンで「某驛方面の人は御急ぎ下さい」等と滔々たる人波に向つてせきたてゝゐる樣に初めて「吾鎭西の地に入りたるかな」と自覺した。

五時五十分何處もかはらぬ夕燒の空を右窓に眺めながら門司を出發した。八幡近くにもなれば流石工業地帶で夕空を背景として眞黑い巨人のやうな煙突が林立してゐる。

日はとつぷり暮れてしまつた。時々製鐵工場の響が暗から聞えて暗に去りゆく。瞬間的に目を射る熔鐵火事場のやうな眞紅の空等八幡製鐵の大規模に驚く中に八時博多着。

汽車の旅に飽き果てた我等は疲勞も忘れて夜の市街をぶらついた。

十月九日　第三日　　茶木伊三郎

空隈なく晴れ渡り、太陽快よく昇りて、我等が旅行第三日の幕は切つて落された。

熟睡の後此の快晴なる朝、一同思はず快哉を叫んだ。午前八時旅館に用具は預け置き、はや市中見物の途に上つた。博多!! 名を聞いてだにいひ知れぬ一種の懷かしみを感じる。

やがて一同東公園に一先づ足を立入る、當公園は地域廣大にして白砂青松、思はず驚嘆の詞をもらした。之所謂歌に非ずして歌、詩に非ずして詩ともいふべきか。而して此の中に巍然として立つ二大銅像がある。一は彼の元寇の當時恐れ多くも　陛下の御身を以て國難にあたらせ給ふた　龜山上皇、一つは法華宗の開祖としてあまねく信仰を得てゐる彼の名僧日蓮上人である。今猶此の銅像の下に修業し祈願をなす者が多い。前者には「敵國降伏」後者には「立正安國」の各四大字を揭げてある。徒步で三十分、筥崎八幡宮に詣でた。

伏敵門頭浪拍天　　當時築石自依然

元兵沒海蹤猶在　　神后征韓事久傳
城郭影浮春浦月　　絃歌聲隱暮洲煙
昇平有象君看取　　處處垂楊繫賈船

自分は幾度か心中で此の詩を吟じた。おゝ今現在自分は此の詩境に接してゐるのだと思ふと限りなき歡喜に滿ちて來る。此の神社の有名なる樓門に醍醐天皇の御宸翰「敵國降伏」の額古びたる、昔を物語るに最もふさはしい。應神天皇を祠る宮である。社の境内には愛らしい鳩が多い。之より二町にして、有名なる懷しの多々良ヶ濱に到る。彼の詩人賴山陽が

筑海颶氣連天黑　　蔽海而來者何賊
蒙古來　來自北　　東西次第期呑食
嚇得趙家老寡婦　　持此來擬男兒國
相模太郎膽如甕　　防海將士人各力
蒙古來　吾不怖
吾怖關東令如山　　直前斫賊不許顧
倒吾檣　登虜艦　　擒虜將　吾軍喊
可恨東風一驅付大濤不使殲血盡嘗日本刀

と歌つたその心自分には此の樣な詩情はない。嘗て學んだ此の詩を思ひ起して、當時の有樣を偲び得るを喜ぶ。當時の築石今尙依然たるものは、更に我等の印象を深むるに足る。しばし低回して去る能はず、當時の英雄吹來る風浪の中に嘯くが如し。終に袂を拂ひ電車にて西公園に向ふ、甘分にして達す。

當公園は小高き段丘の上に在り、博多灣を瞰下し、福岡市を視界に入れるを得、風光明媚なる事また東公園の比に非ず、誰しも絕景!!! 痛快を叫ばざるを得ない。遠く彼方灣頭を望めば、志賀島能古島等元寇の當時を唯獨、其の地中に秘めて靜に寂々として浮んでゐる。

目を右に轉ずれば、天を魔する許り黑煙朦々と立昇る。正に九州第一の工業都市だ。

此處にて松田先生より、此の博多灣並に附近の島々の成因等につき、地理上有益なる詳しい說明を承る。其の一段と高き所に、日露戰爭に於て鬼と呼ばれた吉岡大佐の銅像がある。博多灣をキツト瞰んだ姿は實に英雄の像にふさはしい。かくて博多見物を終へた我等一同は、憧れの博多にも今は別れを告げて、車中の人とならねばならなかつた。零時十九分博多發、二日市驛に向ふ。二日市驛にて下車し、徒步にて三十分。太宰府神社に詣でた。

境内に老楠がある。蒼苔その莖に茂り、千數百年の昔を偲ぶにふさはしく、寂然として一層壯嚴ならしめる。門を入りて社前に至れば一老梅がある。靜にありし昔を語らうとしてゐる。所謂飛梅は之であらう。其の幹殆んど朽ちたやうだけれども、梢は更に新生の影を漂はしてゐる。心靜かに身を清め社前にぬかづけば、今は亡き菅公の御いたましき姿幻の如く、かすかに我目に映ずる心地がする。繪馬堂には昔の菅公を偲ばしめる書畫が多い。此の社を出で電車の停留場に向つた。南風靜かに吹いて秋空は更に高い。

電車で二日市驛に歸り、三時半再び汽車を取つて熊本に向ふ、午後六時熊本着、はや夕方の事とて電燈の光燦然たる中を、旅に疲れた足を引きずり乍ら、三十分にして坂本屋旅館に達し、茲に無事に且有益なる旅行第三日の幕は閉ぢられた。而して此れより展開される熊本市の一夜!!! 二三の友と共に町を彷徨して見たが、晝の疲れに睡氣を覺え、間もなく再び旅館に歸り、明日を期して深い眠に入つた。

第四日　　川澄　健一

旅情匆忙早くも熊本の朝は明け放たれた。

南國とはいへ冷やかな、神秘を感ずる朝だつた。うすもや輕く立ちこめて靜けさを破る雞の聲も朗らかに聞えた。今日は阿蘇征服の日なんだ。かねての希望が果されるのだ。我等はどれ程喜んだ事だらう。秋空は、はち切れさうに高く、深く、青く晴れ渡つてゐる。ゴム風船を放せば無限に上昇するだらうと思はれる、そのすつきりとした青空を見ては、限りない憧憬と喜悅とをひし〳〵と胸に感じるのだつた。午前七時。阪本旅館を出發、我等は朝の冷氣にひたりながら、そして愉快を叫びながら先づ熊本城址に向つた。市街の西方數町にしてその山下に達した。美しいゆるやかなスロープを登つて行く。兩側は正しく並木が植ゑられ、名もしらぬ鳥しきりに囀り、神韻漂々としてたゞよふ。路傍の小草といふ小草には、一面に、もうこれ以上のせ切れないといふ程露を置いてゐる。並木に掛けてある蜘蛛の巣には白い〳〵露がついて、くつきりと水々した綠からきは立つて、旭に映えて美しい。

朝もやにひたりて登るしづか坂
露光る梢にかゝる蜘蛛の糸
英雄をしのびて歩く古城かな

スロープは二町にしてぷつつりきれた。そこが昔の天主閣

の跡であつた。かの英雄加藤清正が築きし熊本城——天主閣は殘念にも失火したといふ。そこには一臺の大砲と彈丸あるのみ。歴史の本で見た清正髣髴として眼前に浮んで來て、追懷思慕の念禁ずる能はざるものがあつた。

下瞰せば、そこに展開された熊本の市街——水々した綠の世界だ。かなたの山には、一條のうすもやがたなびいて、その間からあたゝかい太陽がのぞいてゐた。感慨無量になつて下山。小さい電車につめられる丈つめ込まれ、十分あまりもまれたかと思ふと、そこが名勝水前寺であつた。大泉水池を取りまく美しい芝生は、あたゝかい陽の光を受けて青く、まばゆくたのもしく輝いてゐた。築山もあつた。茶店もあつた。動物園もあつた。ふとり切つた鯉は、すこやかに、詩的に泳いでゐた。九時四十分水前寺を出發、汽車はあへぎながら山の間を深く分け入り一時間半程うねりうねつて立野に到着した。

阿蘇登山

零時半。

靴の紐をしつかりしめ直して、我等一行はいよ〳〵阿蘇征服の途についた。

大空を慕ひて登る秋の阿蘇

始めは平地とあまり變りのない散歩道の樣だ。我等は元氣に滿ち〳〵て聲高らかに校歌を歌ひながら、伸び行く力に對して感謝するのだつた。外輪山を横ぎるや、そこに展開された大原野の壯觀よ。はるか東方を望めば中央火口丘高く聳えて周圍一帶に帝王顏をしてゐる。天涯に高き山又山空の水より澄みたるに波立たず、馳る白銀の舟の如き孤雲の圍何れも好個の詩材畫料だ。雄大と神嚴とを溶かし込んだ樣な英姿を見ては、驚嘆の目を見張らざるを得なかつた。茶褐の山とコバルトの空との限界が、恰も靜かな秋の夜の流星の軌跡の樣にくつきりと天然的に、しかも魅力的に作られてゐる。そこまで行くのだ。五里の山道を!! 周圍は外輪山に取り圍まれてひたすら別天地にゐる樣だ。空氣は水の樣に澄み渡つて雙眼に入る物象は皆鮮かに彼嚴此峯の一皺一稜も算へられる程だ。この舊噴火口の中には、町もあれば村もある。汽車も走る。そして平地と同じ樣に黃金の穗波も明るく照り渡つてゐるのだ。三町も行かぬ中に太陽を背にする爲びつしより汗の中を泳ぐ樣になつた。私はこの大廣原に否大自然に抱かれて、今更ながら人生のはかなさに對してせつない感に打たれるのだ

つた。途中枯れた芒を背負つた馬が下つて來るのとよく出會ふ。上には芒の多い事も察せられた。

馬の行くすゝき背にして秋の山

馬の行く道一筋や枯薄

ふと中央火口丘に至る中間位の所に大きなビルデングが見え出した。先生に聞くと帝大の研究所であつた。

青く澄み渡つた大空に、波の花にも、大理石にも、北極の熊の衣にもなる樣な白雲が筏の樣に流れて行く。二十丁あまりにして白瀧に達した。その何たる雄大さか。何たる白さか。底も知れぬ瀧壺にたゝきつける水音やいかに。

瀧水の白き飛沫や雲の峰

山道のしづけさ破る瀧の音

壯大な眺めにしばし見とれて又進む。これより路を右折すれば今の瀧の上流であつた。その洋々とたゝへた水量は、南洋の河馬でも住む樣な大河を思はしめるのであつた。川を渡ると大きな馬小屋があつて、自然に育つた數匹の肥馬がうまさうに豆を食つてゐた。少しスロープが急になり出した。竹藪を右手にして茶色の道をぐん〳〵たぐつて行く。雨でも降ればどんなに惡くなるのかと思はれる程やはらかな道だ。大勢子供の聲がするぞと思つたら一小村に達してゐた。藁葺屋根の軒の赤いじくし柿の下に涼しい秋風がさゝやいてゐた。

かすかに清水の聲するや、我等は先を爭つて求めに行つた。清水——それは我等の大きな慰安者だつた。耳を澄ませば近くに歌ふ流水は漸く遠く、更に遠くなつて糸よりも幽かな微吟の聲を山の那邊にか立てゝゐる。案内人のいふことではこの邊で一番美しい清水ださうな。十分あまり足を休めた。さあこれから四里だ。清水に更に元氣を增してだん〳〵急になるスロープを突進した。一町も行けばもう廣い〳〵薄ヶ原だ十五夜の頃はどんなに月が喜ぶだらうかと思つた。靜寂だ。靜寂であればあるほど神韻が增して來る。

時計は二時を示してゐた。山又山。薄ばかりの山又山。宮女の襟の樣に重つた山又山。うす曇りした晩秋の淋しい阿蘇の薄は輕く風に點頭いてゐた。今沙漠の中にある宮殿の樣な帝大研究所を通過してゐる所だ。ふと振り返へれば、今來た二里の茶色の道が長蛇の樣に外輪山の麓をねぢつてゐた。我等はこの上もない愉快を叫びながら歩いた。そして幾山も幾山も越えた。しかし大噴火口を見られるといふ大憧憬は、我等を少しもつかれさせなかつた。

山と山との間に又一小村が見下された。鉢卷きをした禿頭の爺さんが、よめか娘か一人の女と、黄色い穗波の間に働いてゐた。きつと美的百姓なんだらう。ひよろつとした木の上に廈せ烏が止つてゐる。それを目がけて歩いて行つた。永く〳〵止つてゐたが、はたまで行くと尾羽で一つ梢を打つて啞々となき樣に飛び立つた。又靜寂にもどつた。スロープは一層急になつた。空は亂れて龍田姫のうつとりと目を細くし又ぱつちりと目を見開く樣な照りつ曇りつの日となつた。風さつと吹けば高山の冷氣はひし〳〵と感ぜられるのであつた。小さい草に今まき立ての樣な灰がたまつてゐる。昨夜降つたといふ事だ。やがて一軒の茶店に來た。平地より三錢も高いリンゴにつかれを慰した。これからはいよ〳〵急な坂になるといふ。前後左右、正面側面、背面横面、並び重なる山又山造物彫刻の手腕に今更驚心駭魄を禁じ得なかつた。一町も行かぬ中に今休んでなくなつた汗が又水の樣に出て來た。スロープも急だが石が多くて歩きにくい。石道もなくなれば、又薄ヶ原だ。狐色の山に灰色の道だ。長い〳〵うね〳〵と曲つた道を行つて一山一山と征服して行くのは愉快だつた。實際嬉しかつたんだ。自然の人となつた我等は心から嬉しかつたんだ。狹い籠の中の鳥が飛び出た樣に私の心も身も空にあつた。自然にあつたのだ。

先刻の茶店を過ぎてから一時間後の四時半。山の一端に腰を下して冷たくかたくなつたキャラメルをしやぶりながら感慨無量になつた。高山の風。何たる冷たさか。水ばなをすゝる者さへある。こゝから噴火口まで約一里。又平地の樣な道だ。茶色からうす灰色となつた道は今やその色を增し切つて灰黑色とまでになつてゐる。灰色の道は冷い道だ。だが高尙な自然の道だ。音樂的な道だ。神秘的な道だ。靴がごぼ〳〵は入る道だ。この一平地を取り圍む小山の斷層線は一皺一稜までもよく見られる、前方には噴火口から白銅の雲の樣なものをむら〳〵と立てゝゐる。我等の心は躍り起つた。勇んで突進又突進。我等は黄褐色なアラビヤ沙漠に比して灰色な沙漠を行くキャラバンの樣に思はれた。噴火口まで百米位の所へ來ると、邊はすつかり噴煙に包まれ、ゆで卵の腐つた臭が鼻をついて來る。——亞硫酸瓦斯である。思はず口にハンカチを當てた。濛々と立ち上る噴煙の渦が明瞭に認められるにつれて、今まで遠雷の樣に響いてゐた鳴動がいよ〳〵烈しく足下に唸つた。益々呼吸困難となつて來た。何だか地獄の世

ト迷ふ樣だ。時に夕陽は西に傾き、一抹殷紅色の殘照が西南の空を彩り、噴煙がうす赤に、紫に美しく染められてゐた。ゴーゴーと物凄く唸り、螺旋をなして噴煙を吐き出す噴火口は天地を搖がさんばかりに怒りくるひ、その怒り極點に達するや、我等はたゞ茫然と、恍惚として火口壁に立つてゐた。

端近く寄つて噴火口を覗けば、底深くして眼眩み、巖基の搖々と動くかと思はれて、妙に吾を吸ひ寄せる魔力に恐れをなしてひつ込んだ。がしかし下界を超越したその刹那のよろこび——俗塵を離れた悠々たる心の感動に、多年の憧れの山上に立つた私は我を忘れて欣喜雀躍したのであつた。そしてこの世界の凡ゆる物を超越してあの哲人の清襟のそれを想起される程の大空に向つて大きく〳〵呼吸した刹那のよろこび——それは私が生れてから未だ一度も味はつた事のない大きな〳〵喜であつた。

火口壁をつたつて次を探れば、鳴動漸く絶えて、ひたすら白煙群り立つのみ。だがよく噴火口を認められこゝに又新しい滿足を感じた。高山の冷氣益々冷たく、風も烈しく噴火口にたゝき込まれさうだ。その次の噴火口は、白黃の熱湯になつた硫黃が池で、これ又この世のものとも思はれない。どちらを見ても驚くばかりだ。あゝこんな高山に三本足の黑い頭をした奴が立つてゐるぞと思つたら寫眞屋だつた。我等は早速噴煙を背景としてレンズの中に飛び込んだ。西に面する根子ケ岳は、そのあるつだけの赤紫色を現はし、夕陽に對してコケティシュな顏をしてゐる。これに對して外輪山は、あはや影の部分となつて眞黑い屏風の連りとなつてゐる。どうして快哉を叫ばずにをられようか。これから夕霧立ちこめる宮地の町に下りるのである。溶岩ばかりの徑なき坂を走つて走つてたゞ愉快に一里餘も走つて下りた。幾分傾斜も少くなつた。それより下り路の足輕く、自然を禮讃しつゝ、感謝しつゝ下つた。馬が背に一ぱい薄を積まれてゐるのとよく出會ふ。自然の懷に、自然の支配の下に、自然を賛けて働く彼等よ。馬よ。今や一日の仕事も終つて唯一の力だのみの馬つれて、夕空赤き下を、口笛高く吹きながら、妻待つ宮地へ歸る彼等よ。馬よ。秋の夕暮のさびしさが、人氣少いこの山を、薄ケ原をおつかぶせる樣に四方から包んで來る。

全く詩の世界だ。詩の國だ。——この阿蘇の夕暮は——大分下りて來たんだ。さすがに下りは足が輕い。紫煙立ちこめる宮地の町。黃ばんだ田、明るい川の流れ、今すべての物が

夜の安息に入る前に、赤い空に名殘りを惜しんでゐる。何所やらに鳴く鴉もいとゞ旅の感じを深くした。足下の宮地の町に火が見え出した。麓で晩鐘がなり出した。直ぐ後にがさがさと音がすると思つたら大きな黑い影が二つぬつと立つてゐた。その馬は私を追ひこして行つた。今や眼に入るすべての者は青いもやに包まれた。宮地の町には入つた頃は日はとつぷり暮れた六時半であつた。山間にしては立派な旅館に笑ひさゞめきながら、つかれも忘れて晩餐を取つた。九時にはもう夢の世界を迷つてゐた。

第五日、第六日　　組田重嘉

樂しい旅もとう〳〵プログラムの最後に到着した。昨日の疲れで朝遲くまで寢た。眼をさました時、朝の榮光は阿蘇山麓の町に明るく輝いてゐた。登山で痛めた足をひきずりながら、やつと停車場に辿り着き、八時三十分宮地發の列車に乘つた。車窓より見える外輪山に、昨日の雄大といふよりは、寧ろ恐ろしかつた噴火口を偲びつゝ友と打ち興じた。毎日長時間の乘車で退屈し、トランプにも倦き果てた時、汽車は湯の町別府に着いた。零時五十分だつた。それから宿屋へ行つて荷物を置き、自動車を待つて地獄廻りに出發した。心持よく自動車に搖られ、町を外れて郊外に出ると、女車掌が流暢な口慣れた調子で解說を始めた。別府の地獄といふのは地下から熱湯の噴き出すのであつて、この地方では殆どあらゆる所から湯が涌き出て、谷の流れまで湯だと聞いて驚ろいた。所々に白い蒸氣が上つてゐるのを見たのは、みんな熱湯が噴出してゐるのだつたらう。自動車は十分許りのドライブの後、八幡地獄の前で止まつた。物凄い音を立てゝ熱湯は涌き出で、蒸氣は霞の樣に一面にひろがつてゐた。その湯の池の中に鬼が金棒を振りあげて立つてゐた。全くの地獄だ、身振ひを感じた、あまりの不思議さに言葉も出ずじつと凝視した。それから鶴見第一第二の地獄を見、再び自動車に乘り、バスガールの沿道解說を聞きつゝ、次に到着したのは海地獄だ。丁度海の樣に青々とした熱湯を湛へてゐた。代表的の大地獄である。次に行つたのは竈地獄である。案內者が丁度竈の樣な所の戶を開けると、中に盛に湯が涌いてゐた。この蒸氣で湯を沸すのださうである。その次は最近涌出した血の池地獄である。硫化鐵を含んで湯は眞赤である。最近爆發した時木を枯らし崖を作つた跡がよく見える。以上で地獄廻りを終つて自動車

は町へ向つて疾走した。右側の車窓に大佛が見えてゐた。奈良のとはずつと大きい。自動車を下りて宿屋へ行つて夕食を取り、温泉に入つた。

二・三の友と打ち連れて町へ出た。鈴蘭燈の綺麗に並んだ情緒濃やかな湯の町だ。あちらこちら歩き廻つた。別府は何といふ落ちついた余情を持つ町であらう。保養地だけに眼まぐるしい華やかさはなく、それでゐて言ふに言はれぬ懐しい町だ。こんなにしんみりとした町で宿まれたらと、どれだけ残念に思つたことであらう。みんな愚痴をこぼしてゐた。九州の土を踏む最後の土地だと思ふと、よけいに宿りたい。併し九時に出船なので八時に宿屋へ集つた。綠丸は大きな船体を埠頭に横たへてゐた。大きな波が磯に碎けてゐた。多くの船客が乘船した、出船も間近くなつた、埠頭は見送り人で一杯だ。離れゆく友と見送る友との間に眞白いテープが張られた。出稼ぎに行く若い青年の手には老いた母親の持つ赤いテープが握られた、友と友との間に親と子の間に幾筋ものテープが張られた、テープがひら〳〵と夜の海風にひらめいてゐた。――突然どらの響が耳を打つた、それは恰も心臓をえぐるかの様に私の心に響いて來た。あゝ樂しかつた旅の數日。大自然の謎の扉を叩き、古めく城跡を訪れ、ゆかしい歴史の跡を尋ねた九州の土地――今や私達は其處を離れようとする大きな期待を持つて旅を待つた、そしてそれは決して幻滅ではなかつた。九州の神秘は限りなき喜を我々の心に注いで呉れた、數日は夢の様に早く過ぎた、さうだ樂しい夢だつた。甘き夢をむさぼつて法悦に浸り切つてゐた私達は、あのどらの響によつて夢を破られたのだ。

「××に着いたらお手紙下さいね」「あなたもきつとね。」「……体を大切にして……」「さやうならお母様……」「お正月には又……」さら〳〵と喘ぐ様な音を立て、テープのゆれてゐる中にこれ等の言葉がとぎれ〳〵に私の耳に聞えて來た……進水機の音が聞えると思ふと船は動いてゐた。船首の方ではM校の生徒が歌ひ出した、僕等も歌つた、狂はしい許りの情熱を以つて咽喉も裂けよと歌つた。誰もがみんなセンチメントのクライマックスに達してゐた、號泣したい様な淋しさがこみ上げて來た。……船はだん〳〵棧橋を去り始めた、交錯したテープが斷れてマストや手摺に巻きついた、私は上甲板に上つた、埠頭の灯も遠くなりかけた、町の灯も遠い水平線の彼方になつてしまつた、一條の町の灯は小さな一

點となつた。船は眞暗の海を東へと走る、別府の灯も見えなくなつた、どちらをむいても灯影は一つも見えなくなつた。空はどんよりと曇つてゐる、全くの暗黑の中を船は航行し續けた。――あゝ旅も終つたのだ。五年生といふマークをつけた時から期待してゐた旅行がこの旅だつたのだ。大きな期待を持つて待つてゐたものに逢つた時には嬉れしいが、その喜の日の終らうとする時の侘びしさはとても堪へられない。デツキの手摺にもたれて闇の中に白く淡く光る海の一點を凝視した。どらの響き以來こらへてゐた淋しさが一度にこみ上げて來た。「終つたのだ〳〵」とつぶやくより言葉は出なかつた。あまりの淋しさに之をまぎらさうと船室へ入つた。そして最後の夢を結んだ。――

疲れが出たのか實によく眠つた。眼を醒ました時船は朝風の中を東へ東へと走つて居り、瀬戸内海の名物――澤山の島があちらこちらに散在してゐた。甲板で輪投げしたりしてゐる中に、船はとう〳〵神戸に着いた。午後二時半だつた、すぐ驛へ急いで汽車に乘つた。行く時ははしやぎ切つてゐた車中も今は靜かだ。旅の印象が交る〳〵走馬燈の様に窓にもたれてゐる私の心に映つた。大津を過ぎると日はとつぷり暮れた。午後六時五十四分――闇の中に彦根城がなつかしく浮んだ、我々は暖い故郷へ歸つたのだ。

多くの先生方に迎へられ「五年生萬歳」を三唱して解散した。とぼ〳〵家路を辿る私の頭上に月は明るく照つてゐた。彦根の町の灯に對して慕ひ寄る蛾の様な懐しみを感じた。神の祝福の手は常に我等の上に下され、無事に旅を終はる事が出來た。

（終り）

第四學年修學旅行記

久馬幸衛

第一日（十月八日）

づらりと並んだ嬉しさうな顔。

やがて彦根驛へゴーツと入り來つた夜汽車にいち早く飛び込んだ百餘人の我等は午後九時四十六分旅行の第一歩を踏み出した。

彦根のお城と町の灯を闇に殘して汽車は我等と共に走る走る――。車窓を時にちらとかすめる灯。野を山を、闇の東海

道を、汽車は默々と進み走る。

車内のにぎやかなこと。うれしい旅の第一夜はかくて更けて行く。

第二日（十月九日）

いつしか夜は明けそめて旅の第二日曉方汽車は我等と共に靜岡の海岸を走つてゐた。太洋の波眞黑の波が磯に白く碎けるその音の聞える程車内は靜かであつた。大部分の者は睡眠不足。朝の汽車が茶畑の間を走りつゞけてゐる頃行手に當つて左手に高く雲峰の上に屹立する富士を見た。旭に、薔薇色にいろどられた富士のいたゞきを去來する雲の間から我等は見る事が出來た。高い山そしてなるほど恰好はいいそれが今朝の富士山である。午前六時。三島驛に下車。驛前に一同は整列する。うるさい汽車の轟音から免れてほつと一息をついだ心と、さあこれからだと思ふ心とが、皆の胸中に渦まいてゐる。官幣大社三島神社に參拜。これから箱根の蘆の湯まで各自が自由に行く事になつた。三島から箱根町まで五里、疲れた足をひきづりながら到着したのは十二時頃。勿論ずつと先に着いた人もあるが、遙におくれて來た人もある。我等一行箱根登山の列は蜒々〳〵實に一里餘にわたつた、とも言へやう。

蘆の湖のすみきつた水と綠の松と紅葉とその風景を賞してめい〳〵蘆の湯の旅館に行く。「きのくにや旅館。」

第三日（十月十日）

昨日の疲れを山の旅館の硫黄風呂に洗ひ去つて午前八時頃小湧谷に下る。小湧谷で電車に乘り更に山を下る。全面皆綠の山の肌が間近に迫る。綠の急坂にかゝる眞向の瀑布、眼下に流れる溪流、その間を我がマッチ箱ほどの電車は徐々に行くのである。

小田原で汽車に乘る。藤澤で降り江の島電車で鎌倉へ。洸漾たる海を見ながら、この頃曇の空を破つて降つてゐた雨がひどくなつてきた。うらめしい雨だ。雨中を一同は鶴ヶ岡八幡宮に詣でる。石段の傍には公曉がかくれてゐたといふ大きな銀杏の木がそびえて空を覆うてゐる。力瘤の樣な根の節々大きな幹に鎌倉の昔を忍ばせられる。

露坐の大佛に向ふ。御胴の中へ這入つて見た。あまり大きいとの感も起さず尊敬の念も遺憾ながら起らずたゞ重さ二萬五千斤と書いた立札を見て感心したゞけ。

長谷の觀音へ一同は向つたが自分は雨具を持參してゐなかつた爲行かなかつた。豫期に反した鎌倉であつた。

さて電車で江の島へ引返す。

長い棧橋を渡る。遠淺の江の島海岸に打ちよせる波はのたり、のたり雄大な波音はあわたゞしい我等の心を慰め且いたはつてくれた。繪の樣な江の島はこれをめぐる眞白な波で一層うつくしい。

宿に荷物をおきくつろいでにぎやかな土産店の店頭をあさりあるいた。

たのしい旅館の夜も更けて行き明日の日を夢にゐがきつゝ眠につく。

第四日　　目加田榮藏

ぐつすり寢込んだ我々は、起きるとすぐに島の向ふ側に行く。ジツトリした土色の空全く殘念な天氣だ。向ふ側へ着くと先づ洞穴見物だ。しばらく入るとローソクを賣つてゐるが、東京の事を考へると壹錢でも惜しくなる。他人のローソクを利用して突入だ。がデコ〳〵でツル〳〵それにたくさんの人でこんなことなら買へばよかつたと思つた。出て來ると命拾ひした樣な氣がした。もういらぬ緊縮は全くこり〳〵だ。

それから組別に寫眞を撮る。大きな波がドーッと來た所をカチンとやるのがいゝ所ださうな、岩の上に立つ。波が來たなーと思ふ頃、ハイーと手際よく撮られてしまつた。僕は何時も寫眞を撮つてもらつた後はもうちいとでいゝから、もつといゝ顏をしてたら——と思ふが仕方がない。又宿の方へ歸る。宿に着くともう大分天氣はよくなつた。もう一度皆の寫眞を撮つた。それから大急行で藤澤行の電車に乘る。驛で先生が東京の交通巡査は氣が短かいからボンヤリせぬ樣にと大きな聲でお話し。僕等の後の方にゐた東京らしいのが、にた〳〵笑つてゐた。何處か大阪か神戸からでも來た樣にみせかけてゐたが、これぢやとう〳〵その事も水の泡だ。中には何んでも大連から來ましたんです。等云つてゐたものもあつた。

藤澤から電氣機關車を先につけた堂々たるのに乘る。いよ〳〵夢の東京に行けるといふわけだ。丸ビルはなんせーでつかいと聞いてゐたので見えはしないか等思ひながら頭を出してゐるが田ばかり。今は未だ藤澤を出たばかりなんだと思ふと馬鹿らしい。がひよつと見えはしないかと思つて頭を出してゐたのは事實。やゝこうしい辨當を食ふ。鹽分百パーセントのきゝめのあるおかず。食ふが早いか早速頭を出す。だが

にあるんだなあと思つた。

それから待つた。〳〵〳〵〳〵。田と畠、田と畠、そしてやつと横濱に着いた。東京だと思ふ時頭に血ののぼる藥が、ちやんと注射されてゐるんだ。

向ふの方には高い建物が立つてゐる。電柱、アンテナ、赤屋根、煙突それ等が眞黑な屋根の上にグチヤ〳〵無數に……ガン〳〵ヒュ――――汽車はそのグチヤ〳〵の中へグン〳〵入つて行く。踏切りズーツと町が見える混雜してゐる。自動車が走つてゐる。パツ――と瞬間に消えて行く。大きな電車が汽車の上下左右をビュ――ビュ――走る。神經が縮みさうだ。時々大きな洋館がヌク〳〵と出る。無數のレールが踏雜してゐる。その中をのべつなしに走る〳〵。これでどうして統一がついて行くんだらう。

色々の物を見る。考へる。それにつれて確に我々は大都會の威壓を感じて來た。かへつて恐ろしい樣なさみしい樣な感じが起つて來た。今頃の彦根の家では何をしてゐるだらうな――等と云ふ考へがふつと起つて來たが、またすぐ何處かへ消えて行つた。もうそれからは窓を見なかつた。……俺はやガタン〳〵。東京だと思つたがそれは新橋だつた。まだかな――もう早く降りてしまひたかつた。このガタ〳〵とあのやゝこしい窓の外、目まひのする樣な景色どうしても窓から頸を出す氣にはなれなかつた。又ぼんやりと東京を想像した。大きなビルデングが並んでゐる。日本の樣な氣がしない。それだけ聞いて來た。そしてそれ以上とても想像出來なかつた。一体何んなに大きなものなんだらう。いよ〳〵東京驛近くだ。荷物をそろへると又ちやんと坐りなほした。そして初めて汽車の中を眺めまはした。皆何時でもと云ふ用意が出來てゐるらしい。そろ〳〵立ちかける者もある。大丈夫だ。此處が終點だ。あの列車時間表に東京行としてあるんだから。汽車がスピードをゆるめた。ドク〳〵〳〵〳〵動悸がうつ。止まつた瞬間プラットフォームのざわめきがザーと車内に流れ込んで來た。汽車から降りるとすぐ階段を降りた。確かに降りたんだ。登つたんではなかつたはずだ。何うだつたか知らない。何にせよ階段を通つたんだ。そしてガヤ〳〵〳〵と皆と一緒に出口まで動いて行つた。驛の天井を見た。色々の彫刻がしてある。皆どや〳〵と出た。見た〳〵〳〵。確に見た。丸ビ

ルや近くの家、家と云ふより大きいの、大丈夫、こんなもの位ひに驚かされはしない。のぼせんぞ〳〵と思ふ。自動車、電車、人、それがあの廣い驛前に一パイに廣がつてゐる。我々は列と云ふ護衛兵に守られて徐々にと前進致します。しかしのぼせあがつた中隊がフラ〳〵と進軍を致しました。丸ビルも知つた事だらう。東京驛も人も電車も自動車も。その萬人嘲笑の中を勇敢にもキヨロ〳〵フラ〳〵ビク〳〵と進軍したのであります。

しまつた。僕は驛を見るのを忘れた。どうかして後ろの方を向きたいもんだと思つた。少し安全さうな所で電光石火の如くチョツーと後ろを見た。東京驛の端つぽの方がチラーと見えた。しまつた。どうかしてゆつくり見たいもんだと思つたがどん〳〵歩いて行くのでとう〳〵見ずじまひになつてしまつた。大きな家と家との間を通ると城端に來た。靜かだ。すべすべした廣い道その前によく寫眞で見た二重橋がかゝつてゐる。整列して恭々しく敬禮した。其處で一同寫眞を撮る。それから櫻田門を通ると電車に乘つて明治神宮に行く。めつたにいらぬ事は話せない。と云つて東京辯も使へない。皆むぐ〳〵してゐる。生つてゐる人を見ると今にも東京辯をベラ〳〵と云ひ出しさうな顏ばかり全くへんな氣だ。何うかみつともない事を仕出かさぬ樣に……。無事神宮前で降りるとづーと兩側に木を植ゑた美くしい道を通るざく〳〵〳〵〳〵。大鳥居をくゞり神宮に參拜する。全くこの東京の中にゐるとは思へない靜けさだ。途中學生の見るべからざるシーン二三拜見する。なる程えらい馬力だ。それから陳列館等を見る。白い石造の繪畫館にも入る。大理石々々々、ベルサイユ宮殿大臣か大將にでもなつた氣持、夢心地で出てから一先づ宿屋に行く事にした。これから何處をどう行つていゝのかわからないので圓タクをはりこむ。えらいもんだ。心地よい道の上をすべるともなくすべると云つた具合「神保町まで」「へい」どだい何とも云へぬ調子。ぐる〳〵〳〵〳〵と雜踏の中を走る。時々ブツブーとラツパをならす。四辻まで來ると「この邊ですね」と云つて降ろしてくれた。「そうですやろ」といつた具合で降りるには降りたが何にもわからん。何うにかこうにかして宿に行く。

僕等の東京に對する感じは唯大都會に對する益々強い刺戟の要求と何か不思議な不可解な物にでも對する好奇心で一パイだつた。東京はまだ〳〵色々な不思議な突飛なすばらしい

ものを我々に見せて呉れるだらう。そして我々に如何に世の中と云ふものが動いてゐるのかを見せて呉れるだらうと思つた。

我々はこれからいよ〳〵その大きなやゝこしい日本の中心である人と家と騒音との塊りである東京を見んとするのである。私は先ずとある食堂に入つてみた。小奇麗な裝飾輕い感じ光に香り音樂色々の物を食べると、しばらくして出て行つた。他に色々の食堂へも行つた。銀座も歩いた。モガもモボもマネキンも見た。デパートへも入つた。省線にも地下鐵にも乘つた。そしてこの大都會全体がそのまゝジヤズだなと思つた。大きな家々自動車のうねり電車複雜といふ語を思はせるサーヴウエーそしてそこにうごめいてゐる人間達は實にもう人間とは思はれない樣な幾萬幾十萬の「塊」だ。その「塊」の中にまた自由な活々とした清新な所がある。その情景は全くジヤズ音樂のメロディヤハーモニーリズムやテンポそのまゝでその乱雜粗雜さが、又いかにも近代的でしかもそこに一種統一のある新らしい雰圍氣をかもしてゐる樣に思はれた。

私はある快感「どこかに何かしら面白味がある」その事の探險による滿足、不思議な胸のときめきを覺えながら寢に就いた。

第五日

朝起きるとすぐに飛び出した。今日は又新らしい好奇心を以て大東京の眞中を歩き出した。豫備校に通ふ人々、學生、會社員、銀行員、ラッシュアワーである。電車の中でも一心に本を讀んでゐる人、何か話してゐる人、乘る人、降る人、これ等の人は皆働いてゐるのだ。

丸ビルの中に入つた。皆動いてゐる。一体何をして何の爲にこれ等の人々は動いてゐるのだらう。無造作にデパートへ吸ひ込まれて行く人々、全く三越も白木屋も松坂屋も全てのデパートの前のあの雜踏は何うだ。

私はじーつと考へた。……泥濘、ボカン〳〵とおどりつゝ泥除けと一緒に走つてゆく自動車、電車の中などで見る營養不良の陰氣な顏、借金の云ひわけばかり考へてゐる樣な表情否さういふ外面的な方面ばかりではない。このデパートの樣な其他多くの乱雜な特權階級の横暴さその反面のあの汽車の中からなどで見る貧弱な家、黑い家々。……私には都會と云ふものに對する一種の反抗的な感情が生じてゐたのだつた。

東京それは我々の豫期してゐた樣な突飛な華かなものではなかつた。それは又我々が思つてゐた程樂しくもなかつた。だが私は全てのものがグン〳〵と動いて行くその震動を心臟に感じ得た樣に思へた。そしてその事が華かさよりも美はしさよりも強く我々の心を引きつけた。全て働かねば駄目だと思つた。人々は全て動いてゐる。苦しんでゐる。私は新らしい東京否日本の將に到來せん事を思ふ。

午後十一時東京驛に集合すると、翌朝六時に着く汽車に乘つた。

赤城登山

一圓宣雄

僕等はM君の提議で昭和二年七月二十五日に赤城登山を企てた。一行は僕とM君、T君、Y君、と桐生のY君の弟と友達で都合六人である。あいにく朝から曇天で今にも雨が降りさうなので翌日に日延をした。翌朝も少し雨が降つたが間もなく晴れたので周章てゝ身仕度をして停車場に向つた。

午前九時五十八分高崎驛を發車し十一時桐生に到着した。停車場にはY君が弟と友達とで僕等を待ちうけてゐた。赤城には此處で汽車を乘りかへねばならぬ。而し汽車は午後一時にならねば發車しない。止むなく停車場で暫く休み汽車辨で晝飯をすませ、Y君の案内で市内を一寸見物した一時の汽車で桐生を發し二時頃水沼驛に到着した。途中汽車は渡良瀬の溪流を下に見て進み兩岸は絶壁で風景が雄大である。水沼驛より僕等は直に赤城に向つた。驛の傍の間道を行く。かなりの急な坂で石がごろ〳〵轉がつており、おまけに脊には重いリュックサックを負ふてゐるので隨分くたびれた。本道に出たら殆んど平坦な道になり歩調もはかどつた。今日は曇天なので一里近く歩くとシヤツは勿論上衣まで汗になつてしまつた。その中に道は段々山の中に入り道傍には小さな木や草が一面に生繁り蜩がやかましく鳴立ててゐる。僕等は退屈まぎれに歌を歌つたり雜談に打興じつつ進んだ。二里以上も歩いたと思ふと小さな森の樣な所に入つた。此所で暫く休んだ。ここから石の多い小道にかはつた。暫く行くと、一軒茶屋があつた。此處で僕等は充分休み握飯で腹をこしらへた。此處より道は急に險しい坂になり而もそれが半里以上も續いてゐ

る。所々で休みながら坂を上つた。なかば近くも行つたと思ふ頃急に霧がまき始めた。向ふの山の頂からは眞白いかたまりが急に此方に向つてやつてくる。見る見るあたりの木や谷も一面に白い霧に覆はれ五六間先でさへもはつきりと分らないその時には日ははや西山に沒しかけあたりには次第に暮色がこめ始め、それが霧と合してなほあたりをうすぼんやりさせてゐる。

僕等はあはてて道を急いだ。けれども足はつかれ汗は冷えシャツはつめたく體は寒さでふるへ、おまけに僕等の外には一人ゐない山の中であるので僕はすつかりおぢけがつき茶屋に歸へつて今夜一晩そこに泊めてもらい翌朝上らうと弱音をはいた。而しここまできたからにはと友にはげまされ重い足をひきづつて三十分位して坂の頂上に達した。いつもなら大沼や赤城の平原がここより一目に見下される との事である、而し今日は霧や暮色の爲にさへぎられ白くかすんだ闇より他は何も分らない。此處より道は下り坂である僕等は勇氣を恢復し歩調を早めて進んだ。時々かすかな尺八らしい音が霧の彼方から淋しさうに響いてくる。その中Y君が聲をはり上げ「オーイ」と叫んだ。すると向ふからも、之に答へるのか「オーイオーイ」と響いて來る。僕等は皆でやたらに叫んだ間もなく目ざす大湖畔に到着した。

白馬登山

藤田泰三

八月六日午前四時半起床、僕が目を覺ますと、一行全部起きて洗面を濟ましてゐた。僕一人だけだ、少々きまりが悪い急いで洗面をして六人が朝食を、手早く食べる。

終つて、愈〻六時過ぎ、白馬館を後に田圃道を一列に、前進する。列は強力を先登に、僕が殿りを務める。朝露を踏んで愉快な、元氣に、しかし幾分の不安をも、交へて前進する。空模樣は大分曇つてゐて、白馬其の他の諸峯は一つも、見出せない。歩いてゐても少し寒い位だ。

約半里許りで、細い道は盡きる、此處より本道に入る。道の兩側には白樺が澤山生えてゐる。これがもう何だか山の中へ入つた樣な、感を起させる。此の本道を清流に沿ひながら約半里進んで二股の少し手前を右に折れる。これから少し坂

道にかゝつて來た。なほも清流を右下に見て進む。此の流は不思議にも上流に行けば、行く程、河幅が廣くなつてゆく。八時半頃、猿倉に來た。此處はすつかり山の中で大木が澤山ある。此處にて背嚢を降し、力餅を食ふ。餅は味も何もない。普通の餅だ。茶屋の人が「此の餅を一つ食へば樂に登れる」と冗談を云ふと、T君が「五六箇食べたら下山しようと思つても登れる」と笑ふ。

九時頃出發、又河に沿つて登る。此の樣に山に河が流れてゐるのは、雪解の水の爲だ。其の爲水に觸れゝば、氷の樣で手が切れるかと思はれる。

ふと立止つて空を眺めると、朝の曇りは何處へやらすつかり晴れて、目の前は太陽に輝いた。神々しい雪溪が見える。胸が躍る、しかしどうしてなか〳〵高そうだ。鶯の鳴く音が方々に聞える。案内者は鶯の谷渡りだと説明してくれた。途中一二回溪を横切る。やはり河だ。此處はもうすつかり細くなつて幅三米位になつた。

十時半頃、白馬尻に着いた。名前は白馬尻だが、もう五分の三以上來てゐる。確か伊吹山頂と同じ位だらう。一行七人の者は天然に少許り人工を加へた約五坪程の巖窟に入り休んだ。中は薄暗い。

晝にはまだ早いが、これから雪溪の爲に早く飯を食べる。此處でガンヂキを取出し背嚢に詰ぶ。又生れて始めての草鞋を履く。なか〳〵履けない。S君に結んで頂く。出發！小屋を出て四五町行けば、一陣の寒風がさつと吹く、はつと思ふと今迄の林の所は、盡きて眼前に大雪溪が擴がつてゐる。しばらく立止つて熱望してゐる雄大な景色に見とれる。寒くなつて來た。ガンヂキを出し强力に一人一人敎を乞ふ。强力は地下足袋のまゝだ。

雪溪の幅は二百米程で、小さな凸凹許りである。雪の上は木の葉や兩側の崖の土塊等の爲に汚れてゐて食べる氣持は起らない。此處より三百米程、下手は雪溪が盡きて今迄沿つて來た溪流になつてゐる。雪の上に降りると始めは冷たくてたまらない。遂には足の裏が痒くなつて來た。しかし二三十分程過ぎると何も感じなくなつた。又雪の質は餘り堅くなくてガンヂキが雪の中に入つて、履いてゐるか否か判じられない位だ。手袋をはめる。

上から絶へず霧が吹き下つて、少し前方は何もわからない。此處では列を組まず一群を作つて登る。下手の激流が岩に突

き當る音が、急行列車の走る樣で、轟々と響いて來る。やがて右手の崖の所にある氷河遺跡に來た。距離が遠かつた爲であるが、期待してゐた程の物でなく、唯大きな岩に斜に筋がいつてゐる許りである。强力の話によると此の岩の側で、昨年金を少量採掘したそうだ。側へ近よつて見たい氣もしたが身体が疲れて來て止めてしまつた。足も少し雪に馴れて來たので、早く上に登り長く休憩しようと思つて群を離れて喘へぎ喘へぎ急いだ。

愈〻長い〳〵雪溪も渡り終つて、雪から何氣なく岩に上らうとすると驚いた事には、雪と岩との間に五六寸の間隙がある。ふと其の中を覗くと斜に下の方に、雪は解けてゐて、丁度刄物の刄の上に乘つてゐる樣だ。深さは一丈程で上からの解けた水が、轟々と雪溪の下を潛つてゐる。乘つてゐる雪が缺ければ僕は永久に此の雪溪の中から出られない。恐る〳〵後ずさりをしてほつとした。他の人々は强力の後から早や岩の上に樂に登りかけてゐる。又此處から河に沿ひ少し許りの雪溪を渡り、ネブカ平に來る。此處は澤山葱が自生してゐる皆細い物許りで天然紀念物との事である。花は地上とは少し違ひ紫色であつた。此處を過ぎると御花畑である。這松が地に澤山這つてゐる。强力に雷鳥の事を問ふと、雷鳥は白馬山は割合に少く、今日の樣な晴れた日には姿を見せないそうで小雨降る時に時折姿を見せる許りである。雪溪からこちらへは比較的苦しい道が多かつた。

御花畑を少し行くともう溪流は盡きてゐた。しかし河の盡きた所から四五町登ると縣營の小屋があつた。其處を左に見て眼前に見えてゐる頂上の小屋に急ぐ。あたりは木が一本もなく唯練瓦の破片の樣な石許りで、ガラ〳〵してゐた。高山の爲に少し急ぐと直ぐ息切れがする。やつと小屋に到着した小屋は五棟ある。小屋に荷物を置き身輕になつて頂上を極めた。展望は充分でなく次から次へと雲が押し寄せて何も見えなかつた。以前の小屋に戻る。丁度五時だ。子供連れとしては豫定より早い方であつた。

それから小屋の前で机を列べ澤山の他人が向ひ會つて、寒さに震へながら、不味い夕食を腹に詰込んで、窮屈な小屋に入り狹い爲に足を半分程、外に投げ出して無理に寢た。翌朝午前三時起床、御來光を拜した。其の時都合よく富士山、淺間山、劍、別山、立山等諸峯の展望を充分に望んで歸りは、やすり温泉に廻り、日本最高の露天温泉に入り歸途に就いた。

伊吹登山

泉泉
泉　堯仁

日めくりの十日と云ふ黑い文字は、妙に私の心を躍らせるのであつた。それは私にとつては、初めての伊吹登山の日であつたからだ。何時もは雄然と聳える伊吹山も、私にとつては別に興味の深い心もおこさせなかつた。否、私の心は伊吹に對しては冷淡であつた。然し今日の私の心は別の心であつた。人間の心といふものは不思議なものだ。急に伊吹山に愛着を引いた私の心がさうである。然しそれと云つても、餘りよく變はる、いはゆる、千變萬化と云ふ樣な心の持主は至つて賴ない。

躍り上る心を抑へて、身仕度をととのへて、夜汽車に身を托した。長岡の驛に下りて、澤山の登山者の群に交つて、うね〳〵と續きながら、ほこりつぽい道を進んで行つた。何分始めてなので、どちらに「山」があるのやら、さつぱり見當がつかない。只、電燈をともして前へ行く人について歩いてゐるだけだ。盲滅法に方角も分らないなりに細い道を進んで行つた。自分等の前を螢が、すい〳〵と飛んでゆく。まだゐるんだらうか、面白いことだなあと思ひながらも歩いて行つた。途中に村があつた。太鼓や鐘を賑やかさうにたたいてゐる。祭かな？　おどりかな？　我々は（四名）一寸首を横にした。しかも一緒に。しかしそれは骨折り損で何の爲の太鼓か分らなかつた。何の爲の鐘であるか分らなかつた。

やがて山麓の宮の境内へと到着した。上野と云ふ所なんださうだ。宮の傍に川が流れてゐる。小さい川だ。大變美しい水なので飲料水に使はれてゐるさうである。水のせせらぐ音につれて吹いて來る風はひんやりとしてゐる。氣持がよい。食事をして一休みして、川の水を飲んでみた。大變美味い。未だに忘れられない。

時計が十一時半を示した時に我々スタートを切つて、すくすくと伸び切つた木々の間を進んで行つた。こんなに勢よく伸びてゐる高い木も、二合目からは少しも生えてゐない。そんなに氣候がかはるのだらうか。どうも木と云ふものは案外弱いものである。僅かの高さの相違なんだが。何の木かと思つて視てみたが、杉だか、松だか分らなかつた。すると葉の